

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：37407

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2022

課題番号：19K24184

研究課題名（和文）心臓手術を受けた高齢患者の回復過程とQOL

研究課題名（英文）Recovery process and quality of life of elderly patients undergoing cardiac surgery

研究代表者

杉野 由起子（Sugino, Yukiko）

九州看護福祉大学・看護福祉学部・教授

研究者番号：40728911

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：心臓手術を受けた高齢患者の退院から退院後3か月の回復過程とQOLの影響を調査するために複数事例研究を実施した。回復には回復群と回復遅延群の2つの過程があり、回復群は手術の影響や症状に対処しながら行動を拡大し、QOLが高い傾向にあった。回復遅延群は、用心のため屋内中心の行動をとり、QOLが低い傾向にあった。退院後の支援プログラムの検討において、高齢者の退院後の回復期間を3か月とした。回復を促進する看護の課題として、退院後の身体負荷の評価と緩和ケア、活動性を維持するために自己管理方法を支援し、行動を抑制する要因分析と療養支援の必要性が明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、心臓手術後の退院から退院後3か月間における高齢者の回復過程やその様相を記述することで、心臓手術後の急性期から在宅療養移行期への継続的な看護の示唆を検討する基礎資料となり、退院後のQOLを向上させるケア開発の一助となると考える。

研究成果の概要（英文）：A multiple case study was conducted to investigate the recovery process and the impact on quality of life of elderly patients undergoing cardiac surgery from discharge to 3 months post-discharge. There were two recovery processes: a recovery group and a delayed recovery group. The recovery group tended to expand their behaviors while coping with the effects and symptoms of surgery and had a higher quality of life. The delayed recovery group tended to be cautious and indoor-centered, and had lower quality of life. In the study of post-discharge support programs, the recovery period after discharge from the hospital was set at 3 months for the elderly patients. As nursing issues to promote recovery, the need for post-discharge assessment of physical load and palliative care, support for self-management methods to maintain activity, and analysis of factors that inhibit behavior and support for recuperation were identified.

研究分野：周術期看護分野

キーワード：心臓手術 高齢者 退院後 回復過程 QOL

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

医療技術の進歩により、高齢者に対する心臓手術の適応が拡大している。併存疾患や身体機能低下のある高齢者の心臓手術は、合併症の発生や術後の再入院のリスクが高いといわれているが、心臓手術による心機能の改善は、術後の QOL を高めるといわれている。在院日数が短縮されるなか、再入院のリスクを伴う、術後の高齢者の継続的な支援が必要であるが、周術期の直接ケアは退院までのことが多く、看護の知見も少ない。

2. 研究の目的

心臓手術を受けた高齢者の退院後 3 か月までの健康の知覚と対処行動から、回復過程の様相を明らかにし、心臓手術を受けた高齢患者支援プログラムを構築すること

3. 研究の方法

第 1 研究：心臓手術を受けた高齢者の入院期間延長の実態と影響要因に関する後方視的調査

目的：待機的に冠動脈バイパス術や弁膜症置換術または形成術手術を受けた 65 歳以上の高齢者の術後入院期間の実態とその延長に影響する要因を明らかにすること

方法：待機的に冠動脈バイパス術や弁置換または形成術を受けた 65 歳以上の高齢者 71 名を対象に、クリニカルパスで設定された術後入院期間で 2 群に分け、術前・手術・術後因子の多重ロジスティック回帰分析を行った。

結果：心臓手術を受けた高齢者の術後入院期間延長は、71 名中 34 名 (48%) に認められた。入院期間延長の独立因子は、術前血清アルブミン 4.1mg/dl、手術時間 362 分、術後せん妄であった。

考察：待機的に心臓手術を受けた 65 歳以上の高齢者の半数が入院期間を延長しており、リスク因子をもつ患者の回復過程やアウトカムを調査し、退院支援を検討することが課題とされた。

第 2 研究：心臓手術を受けた高齢者の退院から退院後 3 か月の回復過程の様相と QOL

目的：心臓手術を受けた高齢者の退院から退院後 3 か月の回復過程の様相と QOL の影響を記述し、術後入院期間延長のリスク因子保有による退院後の回復の影響を明らかにすること。

方法：心臓手術を受けた 65 歳以上の高齢者を対象に複数事例研究を実施した。

調査方法：退院時、退院後 1 か月・3 か月の「健康の知覚」「健康の対処と適応」「患者の環境や状況」「回復の認識や変化」についての半構成的面接、QOL (SF-8) 調査、診療録調査を行い、退院後 3 か月までの回復と QOL を記述した。また、第 1 研究で明らかにした術後入院期間延長因子の有無での回復の影響を記述した。分析は、各事例の面接の内容は SCAT を参考に質的に分析し、診療録調査の結果とともに記述した。事例別に生成された構成概念をカテゴリー化し、対象者全体の回復パターンを記述した。回復過程のパターンに該当する事例の QOL を記述した。術後入院期間の延長因子を保有する事例の回復過程を記述した。

結果：構成概念全体のカテゴリー化において、退院時、退院後 1 か月、退院後 3 か月、それぞれにおける健康の知覚と対処行動が浮かび上がった。

退院時は、【術後合併症・併存疾患による症状】【辛い食事】【不十分な睡眠】【在宅療養に対する不安】【大きな苦痛がないことを感じる回復】などの健康の知覚と、【義務感で食べる食事】【活動と休息のバランス維持】【リハビリの指導遵守】などの対処行動があった。

退院後 1 か月では、【日常生活で痛感する活動耐性の低下】【創治癒や回復遅延の心配と不安】【戻らない食べる力】【活力・体力の回復感】【食欲の回復感】【日常生活の取り戻し】などの健康の知覚と、【大丈夫な感覚を頼りに励むリハビリ生活】【指導内容の遵守】【自分なりの判断の優先】【身体負担を考えた活動の縮小】などの対処行動があった。

退院後 3 か月では、【活力低下による回復の遅延】【個別の手術後遺症】【活動耐性改善の実感】【不安の解消】などの健康の知覚と、【指導内容の遵守】【屋内中心の生活による身体への負担軽減】【自分の体調をふまえた行動範囲の拡大】などの対処行動があった。

回復パターンは、回復群、回復遅延群の二つの過程があり、回復群には併存疾患や手術の後遺症による回復群併存疾患型があった。回復群は、体調を調整しながら行動範囲を拡大し、QOL が高く、回復遅延群は活動を縮小する傾向があり、QOL が低かった。入院期間の延長リスク因子は、退院後の回復に影響しなかった。

考察：心臓手術を受けた高齢者の在宅療養期間は、ADL 拡大に伴う活動耐性の低下や心身の負担が大きく、その時期の継続的な観察とセルフケア支援の必要性が示唆された。

心臓手術後の高齢者の回復を促進する退院後ケアプログラム作成の第 1 段階として、心臓手術を受けた高齢者が回復を認識する標準過程を 3 か月と定義した。回復を促進する看護の課題と

して、退院後のADL拡大にともなう身体負荷の評価と緩和ケア、退院後の環境変化に対処し活動性を維持するセルフマネジメント支援、身体的脆弱性を高め、行動を抑制する要因の評価と療養支援が考えられた。プログラム作成へ向けた課題として、高齢者在宅移行状況の調査とプログラム独自の評価指標選定の必要性が示唆された。

4. 研究成果

心臓手術後の高齢者の退院支援プログラムを検討するために、心臓手術を受けた高齢者の入院期間延長の実態と影響要因に関する後方視的調査と、退院後3か月の回復過程とQOLについての複数事例研究を実施した。退院後の回復には回復群と回復遅延群の2つのパターンがあり、回復群は手術侵襲の影響や症状に対処しながら行動を拡大し、QOLが高い傾向にあった。回復遅延群は、それらの対処行動として用心のため屋内中心の行動をとり、QOLが低い傾向にあった。退院後の支援プログラムを検討し、心臓手術後の高齢者の退院後の回復期間を3か月と定義した。回復を促進する看護の課題として、退院後の身体負荷の評価と緩和ケア、活動性を維持するセルフマネジメント支援、行動抑制の要因評価と療養支援が明らかにされた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 杉野由起子、田村暢成、明石恵子	4. 巻 15巻2号
2. 論文標題 心臓手術を受けた高齢患者の術後入院期間の実態と影響要因に関する後方視的調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本循環器看護学会誌	6. 最初と最後の頁 17-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------